

まえがき

この本を手にとったいただきありがとうございます。この本に興味を持っていただいた方はリハビリの先生か、リハビリの先生のことに興味を持たれている方ではないかと思えます。

私は1987年に理学療法士の養成校に入学しました。当時は理学療法士というものにはほとんど世間の注目はなく、高校の進路相談のときも、担任の先生は理学療法士のことを知らず、初めて聞いたと言われたくらいです。3年間養成校で学んだ後、無事国家試験に合格し、1990年に理学療法士となりました。私がその他の理学療法士と違うのは、国際基準のカイロプラクターだという点です。カイロプラクティックの国際教育基準を満たす大学は世界に44校あります。私は5年間の教育を受け、2009年国際基準のカイロプラクターとなりました。このことは、リハビリの先生としての私の臨床における考え方に、非常に大きなパラダイムシフトを起しました。

実はリハビリに関わる職業はたくさんあります。医師、看護師、介護士、栄養士、メディカ

ルソーシャルワーカー、介護福祉士、ケアマネージャーなど多くの職業がリハビリテーションチームを作ります。そんな中でも理学療法士、作業療法士そして言語聴覚士は、俗にリハビリの先生とよく呼ばれます。この本の中でリハビリの先生といえば、理学療法士と作業療法士、そして言語聴覚士とします。

昭和41年に理学療法士、作業療法士が職業としてこの日本に誕生して、わずか50年で理学療法士と作業療法士の数は急速な増加を遂げました。そして平成2年に言語聴覚士が誕生しました。

理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の職業としての成熟度は、人数の増加に比例して高まれば良いのですが、まったく成熟度が追いついていない印象を受けます。

リハビリの先生は「人の役に立つ素敵な仕事」「使命感があり優しそう」そんなイメージだと思います。私が学生時代にリハビリの先生に持っていたイメージも「志高く使命感のある人たち」というものでした。

もちろん人の役に立ちたいと思っていたり、志高く使命感を持って仕事をしていたりする方もたくさんおられます。しかし、現場はそう単純なものではありません。現場では、特に臨床実習の現場では、リハビリの先生が立場の弱い学生に対して強烈的なモラハラやパワハラ

を日常的に行っているのが現状です。

実際、大阪地裁と神戸地裁では、理学療法士学生の臨床実習中の自殺により、遺族が裁判を起しています。これらのケースはリハビリの先生を目指していた学生が自死を選択するという最悪の結果でしたが、そこまでではなくても、学生時代に大きな夢を抱いていたもの、うつ病などの精神疾患を患ってしまい、理学療法士になった後でさえ、トラウマを抱えていつまでもその苦しみから解放されない方や、リハビリの先生になることを諦めてしまった方々が本当にたくさんいます。

なぜ「人の役に立つ素敵な仕事」に就いたりリハビリの先生が、弱者を痛めつけるモンスターになってしまうのでしょうか？

その原因として、私はこの職業に哲学がないということが関係しているのではないかと考えています。

現場の人間として、人の役に立つ素敵な仕事に就くことができた者として、このような悲劇をなんとかして撲滅したいと思っています。本書を通して、リハビリの先生の光と闇を明らかにし、解決に結びつくなんらかのヒントを見つけ出せたら嬉しく思います。

おことわり

本書で取り上げる事例は、関係者に使用許可を得たものです。プライバシーを保護するため、匿名にし、複数の人の出来事を入れ替え、個人を特定できる特徴を変更しています。